

# 本人の思いを叶える食支援の概念 ～“死んでもいいから食べたい”に、 どう対応するかまで～

執筆 ▶ 新田國夫 一般社団法人 日本在宅ケアアライアンス 理事長 医師  
矢澤正人 同 事務局次長 歯科医師

食べることは、生きる喜び。ケアマネジャーは「死んでもいいから食べたい」という願いを聞くことは少ないだろう。願いと現実の狭間での葛藤は大きい。後悔もあるかもしれない。支援者はどう向き合い、対応すればよいのだろうか。「食支援を軸とした多職種連携モデル構築の研究」等、多職種が協働して「食べる」を支えるための様々な活動を行っている一般社団法人 日本在宅ケアアライアンスの新田國夫理事長と矢澤正人事務局次長に、在宅での食支援の概念整理から、「死んでもいいから食べたい」という願いをどう支えるかまで、詳説していただく。本稿を読めば、葛藤の中に一筋の強い光がさすだろう。

## 1 はじめに

一般社団法人 日本在宅ケアアライアンス（以下、アライアンスとする）では、年1回、7月に、「日本在宅ケア・サミット」を開催し、活動の成果を報告するとともに、その時々テーマに合わせたメッセージを広く社会に発信しています。今年度は、2024年7月28日に、「ここで暮らし続けたいー災害時の在宅ケアと災害復興ー」をテーマに開催しました（本誌2024年9月号掲載）。その中で、在宅療養者の食支援の概念について、多職種で積み上げてきた考え方を提示しました。とりわけ、今後、超高齢化の進展の中で、しばしば現場の医療・介護関係者が会う、「死んでもいいから食べたい」という思い・願いをいだけ患者に、どのように向き合っていくかについても、問題提起をしています。本

稿では、在宅療養者の食支援の概念と、倫理的課題に対する考え方について述べてみたいと思います。

## 2 我々の考える在宅医療と食支援

アライアンスが考える、在宅医療とは、「地域に住まう通院が困難な対象者に対し、人生の最終段階（看取り）も視野に入れて、医師、歯科医師、薬剤師、看護職、リハビリ関係職（PT、OT、ST）、管理栄養士、栄養士、歯科衛生士、介護支援専門員、介護職などが行う医療介護を通じる包括的な支援を指す」と定義されています（文献1）。この定義からも明らかのように、在宅医療を実践していくには、どこまでも多職種協働が不可欠です。

さらに、QOL（Quality of life）のLifeという意味を「いのち、くらし、

生きがい（人生）」の3つの視点からとらえると、治し、支える医療としての在宅医療は「生きがい」を支えることがもっとも重要な目的となってきます。そこで「生きがい」の大きな要因に「食べる」ということがあることから、さらに具体性をもって、わかりやすく市民にも伝えられると考え、食べることを支える「食支援」の概念を整理しました。

## 3 在宅療養者の食支援の概念について

「在宅における食支援」を進めるためには、多くの専門職がフラットな関係で協働することが必要となるため、「食支援の概念」を専門職間で共有することがその第一歩と考え、「在宅療養者の食支援」の概念を整理いたしました（図1）（文献2）。